

WATCH the NEWS

FM802 Meet the World Beat '93

今年も充実の野外公演。



取材・文/早川加奈子

↑CHARA

FM802夏の恒例イベント「ミート・ザ・ワールド・ビート'93」が今年も大阪・万博記念公園もみじ川芝生広場の野外ステージで行われた。梅雨明け宣言もされず、前夜は台風の到来、という天気状況の心配された当日であったが運良く快晴、それどころか、の野外ライブに最高の真夏日となった。この日の出演アーティストは出演順に、KAN、ミスター・チルドレン、チャラ、そして「おおキャラライズ」の大ヒットでお馴染みのネオレゲエのホープDJシャギーが飛び入り出演。次いで関西でのライブは1年振りという実力派シンガー吉田美奈子が清水靖晃&フェビアン・レザ・パネと共に特別出演。そしてFM802のバーソナリティでも知られるシンク・ライク・トーキング、トリはJ-WALKというスケジュール、演出されたステージングをキメたKAN、爽やかなムードとサウンドが野外にハマってミスター・チルドレン、ブラック・ロックなスタイルのキュートなチャラのステージはこの日の華で、それぞれ観客&出演者共に大満足だった。最後は出演者全員の大セッションで93年の「ミート・ザ・」は幕を閉じた。今注目のアーティストがズバリ主演するこのイベント、来年も絶対見逃さないのだ。

少年ナイフ、ボアダムスなど、関西をベースに活動してきたインディーズ・バンドが世界で高い評価を受けている。彼らに代表されるエグイくらい個性的で、ヒビるほどのパワーに満ちた関西インディーズ・シーンにスポットを当てたシリーズ・ギグが「アウット・ラップ」だ。タイ語で「秘密兵器」を意味するこのシリーズは、東西のインディーズ・バンドが相互のネットワークを広げ、昇華し合うために、様々なブッキングがされる。またこのギグ・シリーズの出演者と場所が毎月変更されるという画期的なもの。関西のインディーズ・シーンのガイド(カルト?)誌『G-SCOPE』とスタック・オリエンテーションが企画したこの「アウット・ラップ」包囲網」シリーズの記念すべき第一弾ギグが去る8月に行われたが、続く第2弾が今月23日に行われる。出演は大阪のラフィアンズ、東京の女性バンド、フラメンコ・ア・ゴゴゴ、そして4月にビクターより2ndアルバムをリリースしたペイント・イン・ウォーターカラー。リリックなメロディとハードなエッジを持つラフィアンズ、轟音と美しさが同居するペイント〜は要チェックのバンドだ(今後このシリーズは月一で敢行されます)。

STACK PRESENTS Ah-Woot Rapp 関西インディ・シーン発。



ペイント・イン・ウォーターカラー Ah-Woot Rapp 包囲網その2、8月23日日本・大阪万博記念公園万博ホール、スタック・オリエンテーション#075・7:40P



POISON GIRL FRIEND

WITH MOMUS
INTERVIEW

ゲンスフル世界へと。



取材・文 早川加奈子
通訳 梅田良美
写真/ハリ一中西
協力/日本コロムビア、CUBE

「傷心の吟遊詩人」の異名を持つ英国のミュージシャン、モーマスのアルバム・タイトル『ポイズン・ボーイフレンド』から命名したというポイズン・ガールフレンド。英国音楽と文化に多大な影響を受けたヴォーカリスト/ソングライター、ノリコのソロ・ユニットであるこのポイズン・ガールフレンドが、前述の、彼女の最も影響を受けたアーティスト、モーマスの全面プロデュースによるアルバム「シャイネス」を発表。持ち味のアンビエントな要素とフレンチ・ポップスなテイストが同居したサウンドがモーマスの手によってますますミステリアスに輝くそのアルバムについて、ノリコ&モーマスにインタビュー。

2人の出逢いというのが、モーマスさんがポイズン・ガールフレンドのレコードを日本で買ったことかとか、モーマス(以下M)「自分のアルバム・タイトルに由来したユニット名だと知った時はびっくりしたよ。で聴いてみたら曲にも僕と共通するものがあった。楽しめた。メロディのセンスもいいし、

曲全体としてもアンビエントなものと伝統的なフランス音楽(シャンソン)といったものがミックスされてすごく面白かったね」

今回のプロデュースはモーマス氏側からのアプローチで?

ノリコ(以下N)「気に入ってるアーティストとして私の名前をインタビュアの時に挙げて下さって、それに対してその雑誌から私がインタビュウを受けるといって私の記事が載って、それを彼の日本の友達が訳して送って下さったそうなんです。もちろん私も記事の中で共演したいですって言ってたんですけど、でそれに関しての返答が彼から来まして、そこには色々な方向性の提案——一緒にデュエットする、曲提供をする、アレンジをする、プロデュースをする——が記されてあったんです。それで、だったらもう全部やってよ、みたいな感じで今回は曲提供からアレンジからデュエットから、全部ひっくるめてプロデュース、という形になったんです」

アルバム「シャイネス」は洋楽リリースなんですけど、ノリコさん自身の

音楽の核はやはり洋楽ですか。

N「そうですね。ただやっぱり私もどうしても日本人であるという部分はありますし、日本に住んでも洋楽しか聴かない人もいますし、イギリスに住んでもイギリスの音楽は嫌いな人もいますし、そう思った意味でも人種を超えて聴いてもらいたいという気持ちです。強いですよ」

英語、仏語、日本語で歌われてますが、日本語でも歌った方がいいという提案はモーマスさんから?

M「どんな外国のアーティストでもほとんど英語で歌ってるけれど、そういう英語至上主義のようなものに罪悪感を常々感じているんだ。僕がフランスや日本のレコードを買って聴いた時に、雰囲気だけじゃなく歌詞も理解しなくちゃいけないという意識があるから、その意味で色んな言葉の歌を歌うというのはいいいことだと思うんだ」

モーマスの他にサイモン・ターナーやレイ・フィリップスといったかつてのエル・レーベルの核をなしてた人達が参加してますね。(2)でサイモンとデュエットしているわけですが、あれ、

最初サイモンとは気が付かない(笑)。

N「それは演技してるんですよ。彼は役者だから」

かなりセルジュ・ゲンスフルを意識した、といえますよねえ。

N「あのVOに関しては結構それを狙ったっていうのはありますね」

M「サイモンはお酒ばかり飲んでいつも酔っ払ってる(笑)けど、彼は低い声がとてもいいんだ。セルジュ・ゲンスフルとジェーン・パーキンのデュエットみたいな雰囲気が出せると思ったんだよ」

ノリコさんのVOはフレンチ・ロリィタVOと形容されてますが、いわゆるウイスキーVOというスタイルですよね。ウイスキーVOでノリコさんの好きなシンガーは?

N「プリジット・フォンテーヌのちょっと冷たい感じの囁き声が好きで、ウイスキーVOというスタイルは好きで、パーキンやシャルロット・ゲンスフルなんか好きです」



↑「シャイネス」ポイズン・ガールフレンド。2,800円(税込)・日本コロムビア

Paris Blue.

INTERVIEW.

昨年末にアルバム「シンク・ア・シンブル・ソング」でデビューしたバリス・ブルー。キニートなボーカルで微妙な恋心を歌う谷口晋希と、東大出身のコンポーザー日比野信午の2人からなるこのバンドの2ndアルバム「ア・グルーヴィー・カインド・オブ・ラブ」がリリースされた。王道ポップスのスタイルと歌謡チックな親しみ易さが魅力の前作の延長線上にありながらも、前作以上に伝え切れない恋愛のほどか

しさをリアルに感じる音楽世界が冴える2nd。踊れそうなりズムの曲も増して、そのサウンドの幅も広がった今作について谷口と日比野の2人にインタビュー。お酒落なアートワークやサウンドのイメージが先行しがちなバンドだが(確かに2人ともお酒落だが)、実はお茶目な面もあることがわかり頂けるだろうか。

テビュ作が昨年末のリリースで、2ndのリリースが7月ですから、早く早いサイクルですね。

H「日比野(以下H)「前のアルバムが出るの遅かったですよ。春くらいには出て来て秋に出すつもりがちょっと遅れてたんで、でそれまでに2nd用の曲が出来てたっていう」

谷口さんの書かれた詞が幾つか夏のものでしたよね。でリリースがクリスマス頃(笑)。

H「そうそうそう(笑)。で今度は夏に出てるのに冬の詞が入ってるという(谷口(以下T)「余り夏だから夏の詞という必要はないように思ってますね」

H「どうか先のことは考えられないんですよこの人は。作ってた時が夏だった。今度のアルバムの時は冬だった(笑)。作ってる時の環境がそのまま出てくる、と僕は思うぞ」

T「でも春にまたフルアルバムが出る

予定なんですけど、冬に出す予定がないんで、そう考えとね」

少しづつ一年分揃いますね。

H「一年通して聴いてもええれば、そういうことですね」

もう次作の予定があるんですね。

H「一応秋に3rdアルバムを出そうとそれはアンブレラで、割と少人数でピアノとギターとパーカッションくらいでやろうかな、と。その分声を出し入れられるかなと思ってるんですけど」

お2人はプロデューサーを介して知り合われたんですね。その時の谷口さんのVOの印象は?

H「声がスゴいな、というかパワーのある声というんじゃないんだけど、一度聴いたら忘れられないというか。この辺を「首元」手をやってくすぐられるような不思議な感じがしました。どっちかという子供はいんだけれど心が和むというかそういう声だなと思

いますね」

そんな谷口さんがどんな人かと興味津々なのが「OH MY GOO D!!」の歌詞(笑)。

T「ゴジなんてすね。うちもちょっと(歌詞と同じ)駅から20分位でバスで駅に行くんですけど(バスが来ないんですよ。でももう10分しかない)歩いて歩いたら20分かかる汗タラタラだして(歌詞と同じ)私大事な時はいつもツイてないんですよ」

H「経験なんだ」

T「うん、デートではないけど、で階段から落ちたりするんですよ」

本当に?

T「仕事で疲れて。おじさんに、大丈夫かい?とか言われて」

H「余りいないぞ、そういう人」



◆タイム・アコースティック・エース清水(2ndアルバム「ア・グルーヴィー・カインド・オブ・ラブ」)

協力 キューン・ソニー

Ace Shimizu.

時間軸のズレた世界を。

言わずと知れた聖航海IIのギタリスト、エース清水長官がソロアルバムをリリース。聖航海IIの構成員のソロ活動のトリを飾る彼のアルバム「タイム・アコースティック」は意外にもファンキーでダンスブルな仕上がり。聖航海II「ハーンドロック」というアレンジの中で彼が作ってきたメロディの本質が画されたアルバムなのだ。日常生活のパラレル・ワールドがコンセプトになった今作についてエース清水にインタビュー。

ソロを出す順番が決まっていたんですか?

エース清水(以下A)「全然決まっていよいよ、自然に(「トリ」)なっちゃった。俺ってきつちり準備して、要するに台本書いてきつちり頭の中で作り上げてそれで作ってかなくと、その場のノリで、とかいうのって不得手なのね。ソロを作るんだしたらそれなりの時間をもらって作らないと作れない。(自分に関しては)その場に出てくるもの

ていうのを俺は信頼してないの。それよりも音の並びから何か考えに考えてやっていきたい方だから」

エース清水自身が語る今作とは?

A「聖航海IIで普段やってる音楽とは180度違うし。下世話な表現かもしれないけどファンキーでダンスブルな音作りになってるよ、と」



◆「ア・グルーヴィー・カインド・オブ・ラブ」バリス・ブルー/3,000円(税込)BMGビクター

協力/BMGビクター、六本木オフィス

INTERVIEW

取材・文 / 木村紀子 写真 / ハリー中西
協力 / ザ・ドラマチック・カンパニー株式会社
株式会社バルコ



大槻 珠代



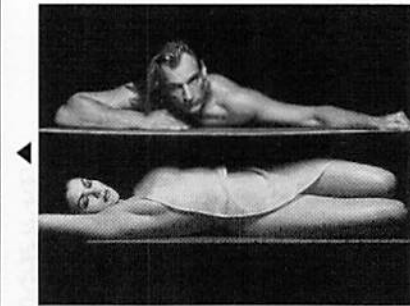
大槻 珠代 (おおつき たまよ)
 1960年 生まれ、京都市左京区出身
 1981年 スターになるべく渡米。
 1984年 ハリウッドでデビュー、その後コメディ
 プロデューサーのミツイ・シヨウ氏に認め
 られる。
 1987年 ラスベガス一流ホテルで満員御礼。
 1987年 全米各地のコメディークラブでライブを開
 始、好評を博す。
 1990年 ABC TVコメディ「Davis Rules」
 レギュラー出演。
 現在アメリカを中心に活躍中。

ボクシング・ヘレナ

全米の好奇心をさらった、J・リンチの怪奇で美しい純愛物語。

公開前にこれほど話題を提供してくれる映画も珍しい。ジェニファー・リンチ初監督作品、その幕開けは主演女優キム・ペインガーの派手な降板劇だった。口約束で出演をOKしたペインガーが突然これを破棄。その結果宣伝費など巨額の損害を被ったとする制作側が訴訟を起こし、裁判の末ペインガーは敗者となる。それも罰金8億円を宣告され、払いきれずに自己破産するというおまけつき。悲劇のセクシー女優。ともあれこの騒動は映画の強力なパブリシティとなったのである。そして次なる話題は新たに主演となったシェリリン・フェン。「ツイン・ピークス」で一時デビッド・リンチと噂になったフェンだが、「ボクシング・ヘレナ」の監督がそのリンチの娘というも単なる偶然か!?が何といても1番ショッキングな話題は、映画のストーリー自体にある。幼い頃、母親が父を尻目に男と情事にふける姿を見て育った、心に傷を持つ若き医師ニック。彼は昔1度だけ寝たヘレナのことが忘れられない。母亡きあと両親の豪邸にひとり移り住み、ヘレナと親しくなるための努力を重ねるも、美しく傲慢で人の気持など考えもしないヘレナはそんなニックを嘲笑う。だが遂に彼にもチャンスが訪れた。ヘレナが交通事故にあい、意識不明となったことでニックは彼女を自分の屋敷に連れ帰るのだ。ふたりだけの世界を創るため、ニックはヘレナの両足を切断する。そしてそれに屈せずニックを性的不能者と罵り続けるヘレナへの愛の証しとして、ニックは彼女の両腕をも切りとるのだった……。「ホラー映画ではない」とジェニファー・リンチが語るとおり、たとえ両手両足を奪ったところでニックがヘレナを支配することは不可能でありそこに彼の悲哀があるという、これは究極のラブストーリーなのだ。ふたりの奇妙な生活はやがて異常な方向へと進んでゆくがそれは観てのお楽しみ。だがしかし/さすがと云ってよいのかリンチの娘。親父に似てヘン。やっぱりすごいヘンな映画なのだ。でも今後、よりヘンに磨きをかけこのまま突き抜けてくれるなら、将来への期待大、というところである。

WATCH the NEWS



リバー・ランズ・スルー・イト

本年度アカデミー賞最優秀撮影賞受賞。兄と弟の、戻らない夏。

ロバート・レッドフォードが若返った!?と驚いてしまうほど、ブラッド・ピットはレッドフォードにそっくりだということはこの映画で知った。自分に似ているから出演させたわけじゃないだろうが、監督はロバート・レッドフォードである。たいした前宣伝を打たないにもかかわらず、全米第2位にいきこんだ作品だ。原作は、多くの大物プロデューサーや有名俳優たちがこぞって映画化の権利獲得に乗り出したというノーマン・マクリーンの自伝的小説。安易なドラマ化を恐れるマクリーンは、何年間も断固として映画制作を拒否し続けたが、最後の最後に熱意でこの作家を頷かせたのがレッドフォードだったのだ。作品の舞台は1912年のアメリカ、モンタナ州の小さな町。父が牧師という厳格な家庭に育ったふたりの兄弟がいた。幼いころからふたりの性格は正反対。兄ノーマンは真面目で頭のよい模範的な少年。そして弟ポールはやんちゃで芯が強く、ひとを魅きつけずにはおかない不思議な魅力の持ち主だった。ふたりにとって父から教わるフライフィッシングは、美しいひとつの芸術であり、兄弟をつなぐ絆でもあった。やがて青年になり、ふたりはそれぞれ別の道を進む。都会で大学を卒業し、故郷に帰ってきたノーマンを、新聞記者となって町で活躍しているポールが迎える。懐かしい兄弟の生活が始まった。自分が都会で忘れてしまったフライフィッシングを、目の前で優雅にやってみせる弟。彼の技は天才的であり、その姿はもはや芸術品だ。兄はふと気がつく。弟は自分とまったく違う世界の間人なのだ。危なげで傷つきやすく、どこまでも向こう見ずだ。そして何故かそこに悲劇の予感を見て、兄はただ茫然と立ちつくすのだった。グレイグ・シェーファー演じる兄の視点が素晴らしい。そして弟役のブラッド・ピット/彼なくしてこの映画の成功はなかったであろう。見終わっても、彼の笑顔とモンタナの美しさだけはいつまでも心に残る。派手な演出、過激な見せ場など何ひとつなく、穏やかな河のように物語は流れてゆく。久々に純粋な「静」の映画を見たと思える。レッドフォードは、すごくいいひとなのだきっと。